

『EARTHRISE 総合英語』の改訂にあたって

～先生方からのフィードバックを最大限に生かして～

三村 浩一

1. はじめに

『アースライズ総合英語』は2022年度から高等学校で使われているが、幸いにも多くの先生方から好評を得ている。このたびの改訂の目的は、教科書との連携をさらに強めることと、採用校からいただいているさまざまなご意見・ご要望を紙面に生かすことである。本参考書は指導経験が豊富な先生方の英知を結集したものであるが、実際に使ってみると、長所・欠点がよく見えてくるものである。できるだけ先生方の声を取り入れて、文法語法の新たな知見や大学入試の情報も生かして、確実にグレードアップができたと自負している。

2. 『アースライズ総合英語』の特長

2-1 4技能に生かせる文法力

言うまでもなく、文法は「読む」「書く」「聞く」「話す」の全ての側面で必要なものであるが、特に4技能に焦点をあてた Tips for Communication などのコラムを適時挟みこんでいる。

2-2 教科書との連携

EARTHRISE English Logic and Expression I シリーズと文法配列・例文・コラムを連携させている。

2-3 図解やイラスト・イメージ図を多用

チャート式の特徴である図解やイラストに加えて、初版からイメージ図を取り入れて、視覚的にも文法を捉えられるように腐心した。

2-4 コラムのアップデート

生きた英語を紹介する REAL ENGLISH は、できるだけ新鮮な素材を提供できるように、古さを感じさせるものは差し替えた。

2-5 4技能連携ハンドブック

発音は音の連結や脱落などを含めかなり詳しく説

明しているのが有益である。また、パラグラフライティングに役立つ情報も満載である。

3. 大学入試問題から

私立大学の入試問題において文法問題は減少の傾向はなく、選択完成問題を中心に引き続き出題されている。一方、国公立大学の入試であり見ることは少ないが、次にあげる2025年度の一橋大学前期大問2のように長文の中で問われるケースもあり、確かな文法力が要求されている。2問紹介したい。

問題1 下線部(Ⅰ)と同じ用法の that を本文中の波線部(Ⅰ)(Ⅱ)(Ⅲ)(Ⅳ)から一つ選びなさい。

- (Ⅰ) But his ideas (Ⅰ)that animals are conscious in the same way humans are have long been ignored.
- (Ⅱ) "If bees are (Ⅱ)that intelligent, maybe they can think and feel something, which are the basic components of consciousness" he says.
- (Ⅲ) "Given all the evidence that is on the table, it is quite likely (Ⅲ)that bees are conscious."
- (Ⅳ) but taken together, it is enough to suggest that there is "a realistic possibility" (Ⅳ)that animals are capable of consciousness, according to Prof. Birch.
- (Ⅴ) animals that have succeeded in these particular tasks can be said to have something (Ⅴ)that we choose to call consciousness.

解説

(Ⅰ)は同格の名詞節を導く接続詞で、(Ⅲ)が同じ用法である。なお、(Ⅱ)は副詞の that で生徒にはあまりなじみがないが、改訂版では p.598 で扱っている。

② くだけた言い方は、this, that が副詞として使われることがある。
The melon we ate was this big. (私たちが食べたメロンはこれくらい大きかった。)
I can't wait that long. (私はそんなに長く待てません。)

—『改訂版 チャート式シリーズ EARTHRISE アースライズ総合英語』 p.598 より引用

(Ⅱ)は真の主語になっている名詞節を導く接続詞、(Ⅳ)は関係代名詞である。(Ⅳ)は **something** が後続の **call** の目的語である点を見抜く必要がある。

問題 2 空欄(A)に入れるのに適した語句を次のの中から一つ選びなさい。

But his suggestion that animals think and feel was seen as an unorthodox idea among many, (A) most animal behavior experts.

イ although ロ at best ハ if not ニ nonetheless

解説

many と most はともに animal behavior experts を修飾する形容詞で、(a+b)x 型の共通関係(本書 p.398)である。many より most の方が程度が高いことから、空欄にはハの if not を入れるのが適切である。among 以下は「ほとんどではないにしても多くの動物行動の専門家の間では」という意味になる。〈A, if not B〉は本書では p.393 で取り上げ、さらに「文脈により、「A, いや B かもしれない」の意味でも使われる」と紹介している。

参考 〈A, if not B〉は、「B でないとしても A」という意味を表す。A と B には、名詞と名詞、副詞と副詞など文法的に同じ働きをする要素がくる。

He was tired *mentally*, if not *physically*.
(彼は肉体的ではないにしても、精神的に疲れていた。)

文脈により、「A, いや B かもしれない」の意味でも使われる。

To carry out the plan is *difficult*, if not *impossible*.
(その計画を実行するのは困難、いや不可能かもしれない。)

—『改訂版 チャート式シリーズ EARTHRISE アースライズ総合英語』p.393 より引用

4. 採用校の意見要望に基づく修正・加筆など

どの教材でもそうであろうが、本書も採用校からの聞き取りを丁寧に行っている。今回の改訂においては多くの意見をいただき、できるだけ取り入れるように努めた。そのうち3つを紹介したい。

4-1 〈have gone to 〜〉

初版では「アメリカ英語ではくだけた言い方で、have[has] gone to 〜がこの意味(=〜へ行ったことがある)で使われることもあるが、イギリス英語では誤りとされるので注意。」と注記していたが、今回削除した(p.81)。運用という観点からはこの表現を使わなくても、have been to 〜を知っていれば十分であり、理解の観点からも共起する many times などの副詞表現があれば意味は推測できると考えたからである。また、『ウィズダム英和辞典 第

4 版』の次の記述も参考にした。

《主に米・くだけで》で「(…へ)行ったことがある」の意味で用いられることもあるが《まれ》やや瑣末な事項で、あえて生徒に教える必要がないという指摘はもっともである。

4-2 〈used to〉の否定形と疑問文

初版では否定形は〈didn't use(d) to 〜〉、疑問文は〈Did S use(d) to 〜〉だとしていたが、「否定文、疑問文の中に過去形はおかしいのではないか」という意見を受けて、文法書や辞書を改めて調べてみた。

(小西 2011)は「疑問文の *Did you use to walk work? / Did there use to be a hotel on that corner?* は口語的で、*Used you to ...? / Used there to be ...?* は堅苦しくてまれ。否定文の *I didn't use to walk to work.* は口語的であり、*I used not to walk to work.* は堅苦しい。」としている。

(Swan 2016)は

When questions and negatives are written, they often have *did ... used* instead of *did ... use*. Many people consider this incorrect.

と述べているが、それに対する見解は示していない。

Cambridge Dictionary (Online)は

The negative of *used to* is most commonly *didn't use(d) to*. Sometimes we write it with a final *-d*, sometimes not. Both forms are common, but many people consider the form with the final *-d* to be incorrect, and you should not use it in exams:

と試験では *didn't used to* を使うべきではないと助言している。疑問文についても同様である。

ほかの英語圏の辞書の調査も踏まえ、改訂版では use(d) から (d) を外して use のみにした。(p.119)

4-3 〈強調の do / does / did〉

初版では「語句をつけ加えることによる強調」の中で、「a) 動詞の強調: do, does, did」という見出しをつけていたが、強調しているのは、文の内容が事実であることであり、『動詞の強調』というのは厳密には違うのではないかという指摘をいただいた。確かに、下の解説は「動詞の前に do[does, did] を置くと、「本当に、実際に」の意味が加わり、文の内容が事実であることを強調する。」となってい

るのだから、この見出しはおかしいので、今回は「do[does/did] による強調」に変更した。「動詞は do で強調する」という刷り込みが筆者にあったと反省している。ただし、命令文では be も強調できるので、項目を別立てにして、命令文を強めるとは言わず、「「ぜひ、どうぞ、必ず」の意味が加わる」と説明している。(p.383)

5. 生成 AI を活用して

教育界での生成 AI の活用は目覚ましいものがあり、さまざまな実践報告がなされている。筆者も昨年後半から無料版の ChatGPT を授業、研究、自己研鑽に使っている。

授業では主に和文英訳、自由英作文の解答例を作成する際に支援を求めている。経験を積んできても、まだまだ自分が作成した英文には 100% の自信が持てない。瞬時に添削してくれるのは忙しい身にはありがたい。精度はかなり高いと思う。添削したものをすべて受け入れるということはないが、膨大なデータを基にしたリライトは勉強になることが多い。自由英作文では語数や文体を指定できる点が便利だと思う。

今回の改訂作業でも大きな力となってくれた。具体的な項目について 1 つ紹介したい。

【！注意】「～できた」は could でよいか(p.102)
初版では 2 つの例文に○, ×をつけた。

○Finally, Kana was able to ride a unicycle.

×Finally, Kana could ride a unicycle.

(やっと、カナは一輪車に乗ることができた。)

しかし、これは絶対的なルールだろうかと思いをもち、『ジーニアス英和辞典 第 6 版』を見ると「過去の 1 回限りの行為に使うのは通例不可」とあった。また、どこかで 1 回きりにも could を使った例に出会ったので、ChatGPT に尋ねて、次のような回答を得た。

Both are grammatically correct, but they have slightly different nuances:

・“Finally, Kana was able to ride a unicycle.”
→ Emphasizes that after some effort or difficulty, Kana succeeded in actually riding it on a specific occasion. This is the more natural choice if you're talking about a **successful attempt after trying many times**.

・“Finally, Kana could ride a unicycle.”

→ Sounds more like she **gained the ability** to ride in general, not just once. It's about acquiring the skill, rather than completing a single successful attempt.

So, if you mean “She finally succeeded after many attempts”, use “was able to”. If you mean “She finally gained the ability / learned how”, use “could”.

確かに、「一輪車に乗るという能力を獲得した」という意味では could を使うことも可能であろう。ただし、finally との組み合わせでは was able to の方がより適切なので、could の例は削除して、次のように断定を避けるようにした。

「(過去のある特定の時に(実際に))～できた」を表すには、〈was[were] able to〉を使うのが原則。

この区別をあまり厳格に適用するのは行き過ぎではないかと思うようになった。『英語教育』2025 年 8 月号の Question Box 17 「「能力」を表す can の過去用法について」が詳しくこの問題を論じているので興味のある方は参照されたい。

6. 終わりに

5 年前に大学を退官してから、古巣の高校に戻り、今年は高 3 の論理・表現を担当している。教職 50 年目になるが、まだまだ教えることに熟達したという実感はなく、自分の英語力にも自信が持てない。ただ、ライティングを教える喜びは減ずることなく、やりがいを感じている。個人添削も 10 人担当しながら、よりよい英文を書けることを目標に日々奮闘している。また、自分の指導経験を教材執筆に生かしていることにも僥倖を感じている。

参照辞書・参考文献

『ウィズダム英和辞典 第 4 版』(2019)三省堂

『ジーニアス英和辞典 第 6 版』(2022)大修館書店
Cambridge Dictionary Online

小西友七(編)(2011)『現代英語語法辞典』三省堂

Swan, Michael (2016). *Practical English Usage* (4th ed.). Oxford University Press.

(帝塚山学院泉ヶ丘中学校高等学校 常勤参与・
元帝塚山学院大学教授)